

INDEX

- 1 教祖生誕200年 大喜多秀起
- 2 高橋弘のモルモン人物伝(7)
理由もなく殺害されたモルモン教徒 ヘンリー・ジョーンズ
- 3 投稿 脱モルモン2年目 dondon
- 4 投稿 体験談 Mr.BIG
- 5 連載 リアホナを斬る(第8回)木塚灯八
2006年1月号 大管長会メッセージ「主の設計図」
- 6 新著紹介

教祖生誕200年 大喜多秀起

モルモン教にとっては特別な年、教祖ジョセフ・スミス生誕200年記念の2005年が過ぎた。ご当地アメリカではさまざまなイベントが実施されたようだ。その一方で各メディアがジョセフ・スミスの実体を取り上げ、モルモン教への歴史の評価を新たに加えていた。モルモン教の神話を否定し、史実に基づく「本当の予言者の姿」が改めて示されたことは、イメージアップをもくろんでいたモルモン教団にとっては想定外の気の毒なことではあったが、社会的には大変有意義なものだった。

ところで、「ジョセフ・スミス生誕200年」と言うことはいったいなんなのだろう。一步引いて考えてみれば「生誕200年」自体が滑稽なものだ。既存キリスト教の否定、そして「もうすぐ世の終わりが来る。皆悔い改めよ！」と言って伝道して来た、新興宗教団体が、これを祝っていることはおかしな光景ではないか。

教祖生誕から200年、教団設立から約175年、歴代の大管長は15代を数える今、果たしてモルモンの教義の根本にある「末日」そして間もなくやってくると言う「世の終わり」をどう説明するのだろうか。「生誕200年」など祝えば祝うほど、「私たちの教えは間違っています」「私たちは嘘をついています」と自らふれて回っているようなものではないか。

「末日」と言う言葉は実際のところは既に死語になっているのだ。彼らの終末思想は過去のものなのだ。それは教団の蓄財ぶりで一目瞭然だ。黙示録のごとき終末を純粋に信じるなら、モルモン教のような状態はありえない。

終末思想を教義として掲げる一方で全くそれに反する行動をとる。そんな矛盾がありながら、なおも無邪気に信仰するモルモン教徒たち。確かに善人ではあるだろうが、常人にとっては彼らには異質な人間性を感じるのも事実である。まったく理解不能と言って良い。

だから、人がそのままの心の状態で、モルモン教徒になることはありえない。そのため、彼らはさまざまなテクニックを駆使しマインド・コントロールしようとする。論理的な矛盾をジャンプしないとモルモン教徒にはなれない。

つまり、論理的思考を失わなければ、モルモン教などカルト宗教の排除は可能ということになる。現役信者にとっても論理的思考を回復できれば、モルモンからの脱却も容易になるわけだ。

わが国で、特に教祖生誕200年のイベントがあったと言うことは聞かない。既に会員の増加も頭打ち、さしたる人材も存在しない。日本のモルモン教の体力は急速に低下している。それはそうだ。考えをしっかりと持った有為な人々は、さっさと離脱して行くのだから。モルモン教は今後ますます廃墟化して行くことになるだろう。

高橋弘のモルモン人物伝(7)

理由もなく殺害されたモルモン教徒 ヘンリー・ジョーンズ

ユタの歴史やブリガム・ヤングを調べている途中で、さまざまな事件や人物を知ることになった。今回紹介するジョーンズも、モルモン教の歴史にかすかな痕跡を残しただけのまったく無名の一信徒であるが、彼が生きたユタという土地とその時代の特異性を知るために取り上げることに決めた。ヘンリー・ジョーンズを取り上げたのは、それ以外の理由もある。まずは資料が豊富に残っていること。また、自らの意思に反してこれといった理由もなく殺害され歴史から消し去られた多数のモルモン教徒が存在したという事実(ジョーンズはその一例)を忘れないためである。

最初に概略をマイケル・クインの研究書から紹介する。

1858年4月、ペイソンのモルモン祭司と彼の兄弟(郡保安官)、同じワードに属する数人の信徒たちが一団になり、近親姦を犯したという理由で22歳のモルモン教徒とその母親を射殺した。当時、ペイソンの町にはリーヴァイ・W・ハンコックというモルモン教団の幹部が住んでいた。リーヴァイ・W・ハンコックは、1834年の「シオン軍」のメンバー、1838年のミズーリの「ダナイト団」メンバー、ノーヴー市警察官、1846-47年の「モルモン大隊」兵士(メキシコ戦争に協力したモルモン部隊)、元ユタ準州下院議員、そしてブリガム・ヤングの「カウンスル・オブ・フィフティ」の古参メンバーであった。モルモン祭司と郡保安官が、教団内では高名

を執行することはありえないことである。

それから30年後のデザレット・ニューズ紙（モルモン教団の新聞）は、モルモン教徒は「獣のような母親と息子」にたいして「むかついており、激怒している」から、この二人を殺害した実行犯には同情できると述べている。新聞の記事はさらに「はるか昔のペイソンの殺人事件」を今さら起訴することは反モルモンであり不必要なことだ、なぜなら近親姦の証拠は（子どもの誕生によって）「明らかで議論の余地のないこと」と続けている。この記事はしかし、子どもも殺害されたことには触れていない。結局、軍保安官は起訴され、モルモン祭司の起訴は取り下げられた。（Quinn, pp.253-4）

ユタきっての殺し屋オーリン・ポーター・ロックウェルの伝記を著したハロルド・シンドラの記述によれば、事件のあらまは以下の通りであった。

ジョーンズは、母親との近親姦を疑われ、手足などを切断されたあげく彼の母親とともに殺害された・・・（以下は、それに付記された註である）・・・このはなはだ奇怪な犯罪はモルモン教徒のあいだにセンセーションを巻き起こした。アシルス（Achilles）が書いた『モルモンの破壊の天使』18・19頁によれば、ジョーンズはごく最近カリフォルニアから（ユタに）戻ったばかりであるが、ソルト・レーク・シティ界隈の住民（モルモン教徒たち）は彼が母親と不自然な関係をもったというゴシップ（うわさ話）を流していた。

...（以下の記述は、アシルスからの直接の引用部分である）

ロックウェル註1 は法を執行するために派遣された。酒場で友人とともにいるジョーンズを見つけた。ダナイト団の首領もやってきて、みんなで彼らの浮かれ騒ぎに加わった。酔いがまわってきた頃、ロックウェルとその手下はジョーンズを郊外におびき出し、ジョーンズを縛り上げ猿ぐつわをかませ、ロックウェルが彼をナイフで去勢した。ジョーンズはかるうじて家に逃げ帰り、その傷から回復した。それから間もなく、ジョーンズと母親はユタの南を通るルートでカリフォルニアへ向けて出立した。ソルト・レーク・シティからおおよそ70マイル（約100キロ）行ったペイソンという町で（ロックウェルとその手下に）追いつかれ、（おそらく、仕方なく）「ダグ・アウト」（どんな場所だったかはわからないが、土手に穴を掘ってそこにドアをつけただけの簡単な住まいだと思われる）で一夜を過ごすことにした。ロックウェルとその手下は、彼らが寝静まった頃、「ダグ・アウト」に忍び込んできたが、ジョーンズはドアが開く音で目を覚まし、襲撃してきた連中から命からがら逃げ出した。連中は先に母親を殺害し、その咽喉を掻き切った。それから連中はジョーンズを追いかけ、3マイル（5キロ）先で捕らえ射殺した。それからジョーンズの死体を「ダグ・アウト」まで運び、母親の横に並べ、ドアを壊して彼らの上にかぶせ、そのまま放置した。

（Schindler, pp.289-9）

この事件にはもっと身近でこの殺害を見聞きしていたナサニエル・ケースの法廷で行った宣誓供述がある。ケースは1850年以来ユタ準州に住み、ジョーンズと母親が殺害された1858年4月15日当時には、ペイソンの祭司チャールズ・ハンコックの家に下宿していた。以下はケースの供述である

殺人事件の前夜、祭司ハンコックの家の二階で秘密の会議が開かれた。チャールズ・ハンコック、ジョージ・W・ハンコック、ダニエル・ローソン、ジェームズ・ブラッケン、ジョージ・パッテン、プライス・ネルソンが会議に集まってきたのを見た。この会議は3週間前から、同じ場所で定期的に繰り返されていた。私はこの会議には加わってはいない、私はただの下宿人である。殺人事件のあった夜の8時頃、祭司ハンコックの家に人が集まってきた。顔ぶれは先に名前をあげた会議に参加していたメンバーであった。彼らは、今夜ジョーンズが馬を盗みにくるから牧場を守るのだと話していた。全員銃を持っていた。

私が上等なミニ・ライフルを持っているのを知っていて祭司ハンコックが貸してくれと言ったが、私は断った。この連中は全員そろって出かけた。彼らがいつ戻ってきたのかは知らない。翌朝、私はヘンリー・ジョーンズと母親が殺されたと聞かされた。日の出から一時間経ったころ、彼らが一夜をすごしたダグ・アウトに行ってみた。母親がわずかなワラが敷かれたダグ・アウトの地面の上に、殺されたときに身に着けていた服をまとめて横たわっていた。額の真ん中から撃たれており、頭には銃弾が貫通した穴が開いていた。15分か20分経ったとき、ヘンリー・ジョーンズが運ばれてきて、彼女の横に置かれた。それから彼らは古い毛布、古いフェザー・ベッド、ダグ・アウト（のドア）を引き剥がし、ジョーンズと母親のうえにかぶせた。

殺人事件のあった次の日曜日、ペイソンのモルモン教会の集会で、祭司であるチャールズ・ハンコックはジョーンズとその母親の殺害について、そんなことは何も気にしちやいない、ことによっては日が明るいうちにやったってよかったんだ、と語った。これは講壇の上から語られたのである、そしてそこには150～200人の信徒が集まっていた。ハンコックには彼らを殺害する何の理由もなかった。私が言えるのはこれだけである。

（Kirk Anderson's Valley Tan, P.2）

近親姦を疑われて、モルモンの復讐の天使こと郡執行官だったロックウェルと、その地域のモルモン教徒によって殺害されたジョーンズと母親であるが、母親が育てていた子どもがはたして誰の子だったのかは確認されていない。に

処罰が実行された。このように、これといった理由がなく、あるいはただモルモン幹部の気に入らないという理由で災害が降りかかった一般信徒の数は意外にも多かったと思われる。その例をいくつか紹介しておこう。

黒んぼのトムとよばれたトマス・コルバーン、またの名はコールマン、はソルト・レーク・シティ郊外でバラハラ死体で発見された。咽喉は大きく切り裂かれ、その首が身体とかがろうじて皮一枚でつながっている状態であった。被害者の胸には次のような警告が書かれた紙切れがピンで留められていた。「すべての黒んぼに告ぐ！白人女には近づくな！」。これを額面通りに受け取れば、黒人コルバーンは白人女に手を出したために復讐に遭ったことになる。実際、先に紹介したアシルスでさえ、コルバーンは異人種間通婚の熱烈な信奉者であり、それを追及していたから殺害されたのだ、したがって「血の贖罪」にしたがって処刑されたのだと述べる始末である。

しかしその近辺に住む人々の中には、それは単なる表面的な理由であり、本当は別の大きな理由があると信じる者が少なくない。というのはコルバーンは準州内で起こった様々な殺人事件について、とりわけロビンソンの殺人に関して数人の連邦役人に内実を暴露したことが、ロックウェルとその手下によって殺害された本当の理由だとささやかれた。白人女の件は、このむごい殺害の真意を隠すための単なるカムフラージュにすぎない、というのである (Schindler, p.345)。連邦役人に密告するようなやつは生かしておけない、というのが殺害の理由であった。

紙面の関係で、様々な事件の例は次回に紹介させていただくことにしたい。

* * * * *

註 1

オーリン・ポーター・ロックウェル・・・教祖スミスやブリガム・ヤングのために数々の暗殺や殺人にかかわった、モルモン教団のために働いてきたプロの殺し屋。西部史のなかでも異色の人物。この当時、ロックウェルはユタ準州の副執行官の職にあったため、逮捕状の発行と法の執行を同時に行うことができた。さらに、モルモンの大管長ブリガム・ヤングはロックウェルに無制限の権威を付与していたため、誰に何の相談もなく、勝手に人を殺害することができた。このため、ほとんど何ら正当な理由もなくロックウェルによって殺害されたモルモン信徒も多数にのぼっている。

参考資料

Affidavit of Nathaniel Case, Sworn to and signed before me this 9th day of April, 1859, John Cradlebaugh, Judge 2nd Judicial District Court, Kirk Anderson's Valley Tan, (Salt Lake City), 19 Apr. 1859
P.2

D. Michael Quinn, The Mormon Hierarchy: Extensions of Power, Signature Books, 1997

Harold Schindler, Orrin Porter Rockwell: Man of God, Son of Thunder, University of Utah Press, 1966

高橋 弘、「ユタ準州開拓史」、『国際経営・文化研究』vol.7, 国際コミュニケーション学会、2003年

その他

投稿 脱モルモン 2年目 dondon

一昨年の脱モルモン宣言、昨年の脱会と我が家には大きな嵐が吹き荒れました。ただその嵐は家を壊したり、道路を寸断したりするような荒々しいものではなく、本来の自分たちの生活を取り戻してくれた、春の嵐でした。

安息日を教会でいやいや過ごす必要もなく、よい隣人でいなければと言う強迫観念もなく、しばらく収めていない什分の一を教会に戻って完全に支払うためにはどうやって工面したらいいのだろうと要らぬ心配をすることもなく、教会に戻るつもりもない夫と離婚を考えてつらい思いをすることもなく、以下略。長い間教会に集われた方ならお分かりでしょう。そんな風にモルモン教会に起因する諸々の苦痛や恐怖から開放されて30年ぶりに本当の意味で何者にも束縛されていない心からの自由と平安を感じる事が出来ました。モルモンの真実の姿を知った当初はいろいろ葛藤もありましたが、長年の私のつらさを理解してくれた夫の存在が、心を軽くしてくれました。

ほとんど同時に脱モルモンした友人たちとは、酒を酌み交わしながら、長年のつらい思いを語り合い、お互いにとてもよいリハビリ期間を持てました。教会員であった時に本当の自分だと思っていたのは実は教会の戒めや、理想とする姿に自分たちを無理やり合わせて作り上げていたもので、それは本当の姿ではなかったのだと気づいた時には、マインドコントロールされていた自分たちがなんともおしく思われました。

そんな風に親たちは自分の本当の姿を取り戻していききましたが、大変なのはモルモン二世として生まれた子供たちでした。我が家の息子たちは長い間のお休み会員時代にそれぞれの世界を築いていましたので、すんなりと脱会届にサ

になって気づかされました。ある子は自分で、ネットでいろいろ調べ、納得できたようでした。

別の子は教えられていたことを完全に否定することができずにいたのだと思います。いつかまた自分の意思で教会に戻るかもしれない、と言う言葉を聞いたときには彼の心の中に残っているモルモンの教えの影響力の大きさに驚かされました。

もう一人の息子にとってはモルモンの教え云々よりも、イエス・キリストの存在が大きかったと思います。彼が私たちの急激な変化に戸惑った様子を見せていたので、お母さんたちはモルモンをやめたけれど、キリストが聖書の中で教えた福音は人間にとって大切なものだと思っていると話してやったことで、安心したようでした。

食事の前に必ずしていたお祈りをやめることには抵抗があったようでした。私は立派な説教者としてのキリストは尊敬していますが、宗教的な意味での彼の役割や、全能の神という存在に対する信仰は失ってしまいました。そのため神に祈るといふ事は大いに抵抗がありました。今はそれよりも日本人が古来から持っている信仰に近い感覚を大切にしています。自然とともに暮らしてきた日本人が食べ物に感謝することは、「いただきます」と言う、食べ物の命をいただきますと言う謙虚な気持ちを大切にしたいと話することで何とか理解を得られました。

いつかは教会に戻るかもしれないと言っていた息子も最近になって、毎週教会に行くと言うのは実際うとうとしかつたと話しているのを聞いたときには、彼の中からモルモンの影が薄くなっているのを感じて嬉しく思いました。

ところがうちには未だに活発会員の娘がいるのです。彼女がアメリカ留学中に私たちは脱会してしまったので、彼女とは十分話が出来ずにいたのです。モルモンの監督宅にステイしていた彼女は活発会員に磨きをかけて帰ってきました。

自分がマインドコントロールを受けているという事を全く自覚していない彼女に、そのことを告げても反発されるだけだと思っているので、彼女が自分からモルモンに疑問を持つようになるまでは、感情的にモルモンの悪口を言うのは控えようと決心し、彼女が帰ってきてからの半年間じっと見守っています。ところが私の我慢も限界に近づいてきています。先日の日曜日彼女は教会に遅れる時刻に、カモフラージュ模様のパンツをはいて出かけました。教会にパンツ？と思ったのですが、うるさい年配会員に何かいやみでも言われたら、それはそれでいいかとも思い、彼女が帰ってくるのを待っていました。ところがいつまでたっても帰ってこないで、一体教会で何をしているのかと、だんだん腹が立ってきました。帰ってきた彼女にどうしていたのかと問いただすと、今日は予備校で模擬試験だったというのです。なあんた！

彼女がモルモンであること、教会に通い続けるという事、ヒンクレイの勧告に従って、毎晩モルモン書を読んでいて、私が客観的な教会に関する本も読んでみてと渡した「信仰が人を殺すとき」や「素顔のモルモン教」の本は全く開いてもいないという事が、私にとっては本当に苦痛です。それは同時に親として彼女をそいう環境においてしまったと言う、自分を責めることでもあるのです。今はただただ彼女が、私たちが教会をやめた理由を真剣に考えてくれるようにと、辛抱に辛抱を重ねてひたすら待つべきなのか、はっきりと話すことがいいのか、行きつ戻りつしながら日々を過ごしています。

投稿 体験談 Mr.BIG

私が、生涯初めてキリスト教と出会ったのは、幼稚園の頃でした。姉と一緒に、家の近くのプロテスタント教会の日曜学校に通っていたのです。先生から、イエス様のお話を聴いたり、賛美歌を歌ったりして、子供心に「なんて、イエス様はカッコいいのだろう」と思っていたものです。まさにヒーローでした。それがまさかモルモン教にはまるきっかけになるうとは・・・。

私がモルモン教会に初めて行ったのは、中学3年生の頃でした。姉が英会話から、モルモンのバプテスマを受けていたのです。私にもレッスンが始まりましたが、その頃は、まだ特定の信仰を持つ気になれず、入信は断りました。しかし、私が高校を卒業して上京し、東京の専門学校に入ってから状況が変わりました。私は某新聞社の新聞奨学生をしていたのですが、お客さんの中に創価学会の会員がいたのです。私は絶好の「カモ」だと思われたのでしょう。創価学会の会員たちによる、入信の説得攻勢が始まりました。私は元来気が弱い性質で、なかなかガンとして断れず困っていたところに、中学生の頃、レッスンを受けていたモルモン宣教師たちの顔が浮かんできたのです。なぜだか、モルモンに入りたくてたまらなくなってきました。

一応、キリスト教を名乗っているようだし、私の幼稚園時代からのイエス・キリストへの憧れもありましたから・・・。なにより、創価学会入信を断る絶好の口実になると思ったのです。そして、私はモルモン宣教師とコンタクトをとり、レッスンが始まりバプテスマを受けました。レッスンを受け初めてから、わずか一ヶ月でのバプテスマだったので当時の宣教師の間では「ゴールデン」と呼ばれていたようです。今にして思えば、これが人生最悪の選択でした。

それからの私は、モルモン教会員としてのゴールデンコースを辿ってきました。伝道に出て（今は消滅した神戸伝道部）、東京神殿で結婚もしました。最

参入に参加していたりしたものです。私は自己陶酔の世界に浸っていたのです。まさに、マインドコントロールを受けていた典型的なモルモン教徒でした。それが、私の精神状態に少しずつ悪影響を及ぼしていたともわからずに・・・。

私が妻と神殿結婚して間もなくのことでした。私は重度のうつ病にかかって、精神科の閉鎖病棟に一ヶ月間の入院を余儀なくされたのです。真剣に自殺まで考えていました。退院してから、現在もメンタルクリニックに通院中ですが、モルモン教会でかけられたマインドコントロールが大きな原因であることは、否定できません。その頃から、私はモルモンの教えに重大な疑問を持ち始めたのです。モルモンでは、よき家長であれ、よき社会人であれ、人々の模範であれと有形・無形の様々なプレッシャーをかけられます。私は、その教えに少しでも忠実であろうと自分自身を知らず知らずのうちに追い込んでしまっていたのです。私は心身共に疲れ果てていました。

キリストは言っています。

「すべて重荷を追って苦勞している人は、私の元にきなさい。休ませてあげよう」と。

モルモンの教えはその反対です。忠実であろうとすればするほど疲れ果ててしまう教えです。私は、これは本物のキリスト教ではないと気がつきはじめました。それから、カトリック・プロテスタント等いろんな正統派と言われる教会を巡りました。聖書研究会・礼拝・・・。

ある日、牧師に言われました。「あなたが、日本中の全モルモン教徒に成り代わって悔い改めなさい！！」私は、この言葉でしっかりと目が覚めました。モルモンが異端であり、カルトであるとはっきりと悟ったのです。以前は「サタンの手下」と決め付けていた反モルモンの活動にも加わる決心をしました。私と同じようなモルモンの被害者をこれ以上増やしたくなかったからです。

そして、モルモン批判のブログも立ち上げました。そこから、先の経緯はみなさんもよくご存知の通りです。「宗紀評議会」と言う脅しでした。しかも、そのことを通告してきた相手は、私が親しかった（友人関係にあった）監督でした。私の気持ちを聞いて、話し合うこともせず、いきなりステーキ会長に私のブログの事を通報したのです。

普通、本当の友人なら、まず相手を説得しようとするよね！？彼にも監督と言う立場があったのはわかりますが、モルモン教の内規はそんな人間的な感情はすべて否定します。組織維持が最優先なのです。散々、モルモンのために尽くし、重度のうつ病にまでなってしまった私の正直な気持ちを綴ったブログを書いただけなのに、この仕打ち！？つづく、モルモンに愛想を尽かし、私は自主的に脱会する道を選びました。

「勇気と真実の会」名義の公開質問状もステーキ会長に手渡しました。しかし、ステーキ会長は、「必ず読む」と言う約束を反故にして私に郵送で突き返してきました。乱雑な「この質問は読めません。」と言う手書きの文書と一緒に・・・。こんな失礼な人を今まで神様の指導者としてあがめてきたのかと思うと、本当に情けない限りでした。モルモン指導者は自己保身に懸命なのです。批判や疑問には一切耳を傾けようとしません。組織維持が最優先、会員の気持ちなどまったく無視なのです。

この記事が載る頃には、私の脱会手続きも完了していることでしょう。しかし、最愛の妻子はモルモン教会に残ったままです。マインドコントロールが解けていないのです。私にできる事は祈る事、愛を示し続ける事。そして、私を正統派の教会に導いてくださった神様に全てをおゆだねすることです。

これを読んでくださった方で信仰をお持ちの方、私の家族が一日も早くモルモンの手から救われるようにお祈りくださると幸いです。

連載 リアホナを斬る（第8回） 木塚灯八
2006年1月号 大管長会メッセージ「主の設計図」

私がモルモン教会幹部の説教を全く疑うことなく信じ込んでいたときは、彼らの説教は高尚で奥が深く、それゆえに内容の理解も困難なのであると思っていました。毎月の「聖徒の道」や「リアホナ」の説教は読み終えるだけで一苦労であり、総大会特集ともなればその分量の多さにまいってしまいました。

しかし現在そのようなことは全くありません。モルモン幹部の説教が読みにくいのは文章がおかしいからであり、理解しにくいのは内容が支離滅裂だからだと気がついたからです。モルモン教会においては幹部の地位や発言は絶対であり、彼らを否定することは神の僕を否定することであり、信仰が弱くなるとされます。モルモン幹部が世界のあらゆる賢人を超越するような驚嘆すべき発言をしている人たちならともかく、実際はモルモン幹部たちはしょっちゅう、おかしなことを口にします。それは思い付きであったり、ありきたりの言い回しに毛の生えたものであったり、保身のための弁解であったりするのです。

モルモン会員は幹部の無責任な発言に何とか意味を見出そうとあれこれ考えるのですが、せいぜい自己完結型の強引な論理で終結します。私もかつてそうでした。私の場合は「幹部の発言は実は重要な意味が隠されているが、内容が高度なので今はわからない」という思い込むことで解決していました。また別の人には（ネットでも良く見かけますが）、幹部の発言が何か時流に沿ったものであったり、たまたま先読みしていたように見えるときは、「やはり神の予言

におかしいときは「それは幹部の個人的意見でしょう」と事も無げに知らぬフリを決め込んでいます。おかしいものに、おかしいということができないのです。このような状態を表現するのに「思考が停止している」という言葉は実定的確だと思えます。

さて今回はリアホナ2006年1月号の記事を取り上げるのですが、これもまたご多分に漏れず、全く無意味な記事でした。筆者はモンソン副管長で題名は「主の設計図」となっています。モンソン長老は聖典の言葉を設計図に見立てて、そのとおりに行動するなら主の思い描いた人間が出来上がると言いたいようです。

実に安直で子供じみた発想ではないでしょうか。私たちは「隣人に偽証してはならない」という一節でさえ人間社会の中で守り通すのが困難、いえ正直に言えば不可能です。だから救い主を求めるのがキリスト信仰だと思います。しかしモンソン長老の考えでは、聖典は設計図なのでそのとおりに行えばよろしいと、何か人生というものをまるでプラモデルを組み立てるように考えているのでないでしょうか。少なくとも本当の苦労に直面した重みは感じられません。

モンソン長老は新約聖書のテモテ4章11節以降を、いつもの如くですが、箇条書きによるモルモン信仰のハウツー講座という形式で解説しています。おそらく本人は詳しく説明しているつもりなのでしょうが、モルモンにとって信仰とはこの程度のものなのかとがっかりさせられるお粗末な内容です。

時間と誌面の都合がありますので全てを取り上げることは無理ですが、一つ取り上げればジョージ・A・スミス大管長が第2次大戦直後、ヨーロッパの会員に援助物資として送る衣類の視察にソルトレーク市内の施設を訪れたとき、非常にたくさんの物資が集まったことに感激して、自分の着ていた真新しいコートを手渡したという話を紹介しています。そしてこのスミス大管長を生活の中で慈愛を行動に移す模範だとべた誉めしているのですが、普通に読めばいったいどこが慈愛の模範なのでしょう？このエピソードが作り話だとは言いません。おそらく実話でしょう。また彼がコートを提供したこと自体は悪いことではありませんでしょう。しかし多くの名も無い人たちが彼と同じことをしています。おそらくスミス大管長はそうした人たちの善意がこもった大量の物資を目のあたりにして、「真新しいコート」を着込んで安寧としていた自分に恥じた、ということではありませんか？なぜこの出来事がスミス大管長を誉める話になるのかさっぱりわかりません。

モンソン長老が高齢のため思考能力が著しく低下しているのかもしれませんが、いずれにせよ、おそらくモルモン会員はこうした話を美談だと受け止めることでしょう。しかしこうした類の話はもし世間に広めようものなら、私がしたような指摘を受けるか、バカにされるのがオチではないかと思えます。モルモン会員にとっては何でもかんでも幹部が語ることは正しいという前提になっており、疑うことは罪とされています。モルモン教会によってそのように思い込まれているからです。これはカルト宗教の特徴でもあります。疑うことをせず、思い込みだけを続けていけば、行き着くところは思考停止、そして人格が蝕まれていくのです。

新著紹介

「カルト」を問い直す - 信教の自由というリスク」
(櫻井義秀：中公新書クラレ)

著者は北海道大学文学研究科教授で、マインド・コントロール研究の大家。統一教会、オウムなど名だたるカルトとの長年の取り組みから、カルト問題、特に信教の自由とのかかわりのなか、私たちがどう生きるかを考える。

「資料で読むアメリカ文化史(2) - 独立から南北戦争まで」
同書内の4章「『世界化』する宗教共同体」で、平井康大氏がジョセフ・スミスの日記を翻訳している。これは後に高価なる真珠の「ジョセフ・スミス歴史」の基になった記録である。教団が公式に教える内容と相違する点が多々あり、以前からモルモン史の偽りを指摘する資料として取り上げられて来たもので、邦訳としての意義は大きい。ただ、実はこの日記さえも既にジョセフ自身の創作であり、より先行するジョセフ本人の手書き日記を取り上げて考察しなかったのは、研究としては不十分な印象がのこる。

ミシシッピ=アメリカを生んだ大河」
(ジェームス・M・バーダマン：講談社選書メチエ)
北アメリカ大陸を南北に横切る大河ミシシッピ。アメリカを語る時、東、西海岸をもってすることが多いが、ミシシッピの歴史を通じて南北から考察を加えた、目からうろこの力作。第5章でノーヴー時代のモルモン教が語られている。記述は短い、分かりやすく、また別のアメリカ史視点からのモルモンが見えて面白い。

ニュース

モルモンQ & Aのコーナーはお休みします。
勇気と真実の会は賛助会員募集中です。
詳しくは当会へお問い合わせください。
投稿記事募集

文章はプレーンテキストで作成してください。

メールマガジンバックナンバーはこちらから
<http://cgi.kapu.biglobe.ne.jp/m/9211.html>
メールマガジンの購読申し込みはこちら
http://jemnet.hp.infoseek.co.jp/htm/biglobe_mailmag.htm

- ・発行者 勇気と真実の会 会報編集部
- ・ホームページ <http://jemnet.hp.infoseek.co.jp/>
- ・メールアドレス jemnet@infoseek.jp

Copyright(c)1999.JEMNet. All Rights Reserved.
無断での転載・転写・複写・転送などは禁じます。
転載・複写の際は、事前に発行者へご連絡ください。

【解除はこちら】

<http://cgi.kapu.biglobe.ne.jp/m/9211.html>

このめるまがはお客様からのご登録に基づき、カプライトより配信されました。